

甘えるな！——創造者の立場に立つことを学べ（2）

NWOの無神論引き締め戦略としての、ホーキングの *The Grand Design*

Greatchain

2018/7/18

この2012年ロンドン・パラリンピック開会式への、スティーヴン・ホーキングの出演によって、彼がイルミナティに協力していたことは明らかである。これが、彼の積極的参加であったのか、単に利用されていたのかはわからない。しかし「単に…」という線はなくなるであろう。彼が2010年に、明らかに宣伝または洗脳的意図をもった、きわめて異常な本（共著）を出しているからである。ある怪しい（当時、今ほど顕著に怪しくはなかった）集団に強制されて、講演はできても、本は書けるものではない。

彼がパラリンピックにとって、きわめて好都合だった理由は、いくつかあるだろう。まず彼が身障者であること、世界的に有名なカリスマ的物理学者であること、彼の機械を通じて喋る声が、あたかも天からの声のように聞こえること…。

私は、ロンドン・オリンピックの前年、2011年1月に、「異常なホーキングの新著 *The Grand Design*」という論文を、ある新聞に書いた。もちろんそのとき、彼の翌年の冒険など予想すべくもなかった。今から思えば、彼の2つの異常行動は明らかにつながっていた。以下、この私の旧記事を引用しながら書くが、イルミナティ NWO についての一般認識は、その当時より格段に深まっているので、確信をもって論ずることができる。まず冒頭の部分を引用しよう：——

スティーヴン・ホーキングの新著（共著）*The Grand Design* は、やはり前に書いた通り異常な書である。ただ著者がカリスマ的な人物であり、これを利用したがる無神論者やメディアが存在するであろうから、これを、ただ異常だとして片づけるわけにはいかない。そもそも「大なるデザイン」という書名が眉をひそめさせる。この本は、いかに宇宙がデザインされたものでないかを主張するものだから、これは逆説の効果を狙ったのであろうか？ それにしても異常である。

「デザイン」は当然「デザイナー」を前提とするが、デザイナーは存在しないというの

がこの本の趣旨だから、これは「デザイン理論」の台頭によって無視できなくなったデザインを逆手に取って、デザインの概念の換骨奪胎を狙っているのだろうか？ だとすると、「作品とは作者をもたないものことだ」と説明するようなもので、ここまでくると正常とは思えない。

この謎はいまでも消えない。では、こんな奇書がなぜ話題にならなかったか？ それは、おそらく当惑した翻訳者が、何のことかわからないまま、全く無関係な別の題に訳したからである。しかしこれでは、筋は通ったとしても、この本を訳すこと自体の意味は、わからないままであろう。著者たちが、こんな題を選ぶことは考えられないから、それを選んだのは、この本を依頼した者たち（同時に、パラリンピック出演を依頼した者たち）で、彼らはこの馬鹿げたタイトルで押し切ったのではあるまいか？ 彼らは「インテリジェント・デザイン理論」という、科学者の純粋な実証によって割り出した「デザイナー」（＝創造者）の存在を、おそらく許すことができず、「デザイン」の概念そのものを攪乱させようとしたのではなかろうか？（彼らが民衆を“愚弄”するのはいつものことである。）それほど彼らは、Intelligent Design の神が学界に君臨し、無神論のダーウィン進化論を追い出そうとしていることを、恐れていたのだろうか？ 法王ベネディクト 16 世の追放事件も、考え合わせるとよい。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180706.pdf>

彼らが、民衆支配の道具として、必死にしがみついていた、無神論や進化論を否定されるということ、代わって、科学者の保証する「デザイナー」を受け入れるということは、彼らがこの惑星の支配に失敗したことを意味する。ID 論者は殺されたとは聞かないが、有神論的パラダイムの holistic 医師などは、次々に殺されている。その彼らの狂気を見ればよい。

そこで彼らは、神格化されたスティーヴン・ホーキングを利用して、衰えかかった唯物論をあらためて強化する、無神論・唯物論「引き締め」工作をしなければならなかった。その結果が、『大いなるデザイン』という、デザインを否定する、人を食った本だった。ここに唱えられている唯物論・無神論は、現代的な粉飾を施しているものの、読者の常識と神経を逆なでするアナクロニズムである。そして、このタイトルの自己矛盾は、この本の宣伝役にもなっているドーキンズの、「この自然界は、デザインではないのにデザインされたかのような、見事なまがいものだ」という詭弁と、不思議なほどよく似ている。（一つついでに言えば、この本は、ダーウィンと、アルフレッド・ウォーレスを同志のように言っているが、ウォーレスは晩年、完全なデザイン論者になっている。）

まず冒頭で「哲学は死んだ、哲学は科学の発達に追いつけない」と言っているが、あるユーチューブでこれを叩いているように、これだけでも馬鹿げている。果たして少し読み進むと、こんなことを言っている——「我々は自分のすることを選ぶことができるよう

に思っているが、生物学の分子的基礎を理解すれば、生物学的過程は物理化学の法則に支配されており、したがって惑星の軌道と同じように決定されていることは明らかだ。…我々は生物学的機械以上のものではなく、自由意志は幻想に過ぎないようだ。」(31-32 頁)

たいていの人は、ここで愛想をつかして読むのをやめるだろう。自ら認める通り、ホーキングの「哲学」が極端な科学的決定論であることが、これだけでもわかる。人間をこのように理解すれば、我々は生きているのではなく、生きているように見えるだけである。

結論として私はこのように書いた：——

ホーキングは、この宇宙も人間も「無から自然発生した」ものだと言い（無の定義もなく）、コンピューターの「生命ゲーム」と、現実の生命に、本質的な違いはないと言う。学者がどのような思想を發表しようと自由である。しかしそれが、きわめて恣意的で浮薄な根拠によって、生命軽視につながるようなものだとしたら、それが社会にどういう影響を与えるか考えてみなければならない。明らかにそれは人間破壊思想である。それが外に向かって暴発したのが 20 世紀の数々の大量虐殺であった。それが内へ向かって内攻すれば、試しに人を殺してみるといった異常精神を生み出すだろう。

もしこの本が、ダーウィン進化論に対する ID 理論のような、科学論争のこの時期に、戦略的に出されたものであるとしたら、確実に、無神論陣営のマイナス点を稼ぐものである。

私はこれを書いたとき、ホーキングが、イルミナティと癒着しようとは思わなかった。しかし、この本がある不吉な動機をもつことはわかった。純粋な科学的動機で人はこんな本は書かない。彼らが、こんな不自然で過激な本を書いて（書かせて）、神を抹殺しようとあせればあせるほど、それは我々にとって、神が生きていることの、ますます確実な証拠になる。彼らが何かを必死に宣伝すればするほど、それは、そのものが嘘であることの宣伝になる。

——以上